
ECOOR BIRTHDAY

水鏡 清華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E C O O R B I R T H D A Y

【Nコード】

N 2 6 5 2 B A

【作者名】

水鏡 清華

【あらすじ】

2125年。深刻な自然枯渇が問題視され始めた年。ある科学者が『人類にとって最悪の実験』を実行した。人類の6割を巻き込んだこの実験は、見事成功。世界に混沌が訪れた。

少年、雨宮 守が所属している、防衛ギルド『SUN』は実験によって出現したエコーを撃退する為に活動している。

もう二度と、大切な人を自分の前から無くさないように。

000 『プロローグ』(前書き)

戦記ものを書いてみたいと思い、思い切って投稿しました。
楽しんでもらえたら幸いです。

不定期更新です。

000 『プロローグ』

空を覆う雲は一切の光を拒絶するように立ち込め、かろうじて見えた月の光だけが地上を細々と照らしていた。

光は小さく、弱弱い物だったが、目の前の《敵》を目視するには十分すぎるほどの物だった。俺はその敵　　狂人エコーに向かつて右手の黒い無機質な物体を傾けた。俺の愛銃《デザートイーグル50AE》だ。落ち着いて、しかし素早く照準を合わせ、動く暇も与えずにトリガーを絞った。

小さな閃光。わずかに遅れてかぁんと乾いた銃声が俺の耳に届く。

目に見えて近距離から撃ったので銃弾は外れるわけもなく狂人の胸の中央に直撃した。ドロドロと、血が決壊したダムのようにあふれ出し、コンクリートの床を一瞬で紅色に染めた。

「ヒヤハハハハ……ハハハハ……フヒヤハハハハハハハハ！」

だが、そいつは笑っていた。体を撃ち抜かれても直、愉快そうに口元を大きく歪めている。まるで、撃たれたことに気づいていない様に。

「うえ、やっぱり気持ちわりい」

いくら仕事でも、人……いや、もはやこれは人では無いが、生物を殺すのは気が引ける。あっさりと死んでくれたらいいんだが、普通の銃弾で簡単に死んでくれるわけもなく長期戦は必須。

さらに身体能力は人間を優に超えている。

「あー、もうやってられつかよ……狂機制限解除モード《絶》」

カーシングガンはサイマフット

突如として光出した右手の銃が瞬時に光り輝く無数のポリゴンの欠片となり四散。

光の粒は少しずつ姿を変え、《デザートイーグル50AE》より一回り小さい程の二つの銃を生成した。

これは対狂人用に作られた武器、《狂機》カーシングウェポンだ。狂気計画実行の後、生き残った者たちが科学を集結させ、完成させた化学兵器。

一つで軍隊を壊滅させるほどの威力を持ち、そして唯一狂人に対抗できる、最後の希望。

だが、欠点は大いにある。

その中でも一番の欠点は、使用が半端ではないほど難しいからだ。基本的な銃は反動を考慮して、安全装置などが取り付けてあるのがメジャーだが、この狂機と呼ばれる物は安全装置、リフサイト照門すらもなく制御が非常に難しい。

反動もほかの銃と比べ物にならないため、出力を抑えながら撃たなければいけない、もし100%の出力を出した場合は体にかかる負担が激しく、最悪は死に至る。

その操作の難しさから、使える者が極端に少なく未だに狂人との戦闘にはあまり活用されていないのが実体だ。

「俺早く帰りたいからさ、もう終わらせるぜ」

両手に携えた銃を前方に構え、狂人の方に向け照準などを一切無視して即座に発射した。

放たれた《光線》は闇を切り裂き、一瞬停止した。直後、四方八方に散り、瞬く星の様に散りばめられた銃撃は狂人を円状に囲み、

一斉に体を貫いた。

これが、狂機最大のメリット。《特殊弾》だ。

例えばこの銃につけられている能力は追跡攻撃と銃弾爆散。

追跡攻撃は自動で敵を補足し、自動で追跡。確実に弾を当てることが出来る機能。

銃弾爆散は発射から時間差で発動、一本を軸にいくつもの銃弾に分かれ、敵への付属ダメージを増やす機能だ。

どちらも一見しては便利な機能だが、やはり操作が難しい。

追跡攻撃は確実に銃弾を当てられるが、しっかりと《敵》を認識しなければ追跡することは無い。つまり、適格に相手を敵だと判断する集中力が必要になる。

「ウグツ、アア！」

この攻撃には流石に微かな悲鳴を漏らし、目をギラリと光らせながら此方を睨んできた。体の一部分は焼切られ、足はもうなくなっている。それでも俺はふぜんとして振る舞い、僅かに口を吊り上げた。

「まだ生きてるか、結構丈夫なんだな、お前」

狂人には思考能力が無いが、今だけは俺の表情を読み取ったとしか考えられないように、顔を怒りに歪めている。それを見ながら、もう一度トリガーを引き絞ると景気のいい轟音が響き、完全に狂人の体を消し飛ばした。最後に小さな声で「ごめんな」とだけ囁き、今回の任務を完了した。

「おかえり〜。どうだったあ？」

任務完了の報告を済ませ、そろそろ帰ろつかないかと思っていた時に不意に背後から声をかけられる。やんわりとした穏やかな雰囲気か

声にも滲み出ているその声は大いに聞きなれたものだった。

「ただいま帰りました、鍵音さん」

踵を返しながら軽く手を上げてそれに応じると、まだあどけなさが残っている表情がにっこりと笑顔を作り、カールのかかった黒髪をふわりと揺らしている小さな女の子が佇んでいた。

彼女の名前は浜白はましろ 鍵音かぎね。この国でも有数の技術の持ち主で、俺の義母だ。

鍵音さんは可愛らしく頬を膨らませながら俺を睨みつけた。

「も」。鍵音さんじゃなくて《お母さん》って言うてよ」

「流石に3歳しか違わないんですから、お母さんは違和感ありますよ」

不満そうに口を尖らせる鍵音さんを見ながら、小さく苦笑する。

この人はこれでも21歳。俺より年上なのだ。

外見だけを見ると、10人中10人が小学生だと思っだろう。

「なんか失礼なこと考えてない？ 守君」

「はい？」

余計な思想を頭に浮かべていると、鍵音さんがこつちをじとつとした眼で睨んでいた。

……この人は心を読めるのかよ。

が、そんなことを言うと話がさらにややこしくなりそうなので適当に取り繕いながら話を戻す。

「で、わざわざ呼び止めたって事は何か用事があるんですよね？」

「あ、わすれてたよ。じゃ用件を話すね……守君」

さっきまでの表情とは一変。真剣な声になったのを聞き、緩んできた心を引き締めた。

「あの狂機、《絶》はどうだった？」

「やっぱりその話ですか……えっと、あの狂機正式名称は《絶銃》でしたっけ？」

こくりと無言で頭を縦に振る鍵音さんを見ながら話を続ける。

考えながら、少し急ぎ足で家へと歩いて行った。

「ただい……」

「遅いです!」

言葉を言い終える前に断ち切られた俺は少し口を尖らせる。

この子は俺の義妹、雨宮^{あまみや} 梓^{あすな}だ。

つややかに光る銀色の髪と黒色のマフラーを揺らしながら、ずいずいと詰め寄ってくる。

背は低く、鍵音さんと張り合えるくらいだが、微妙に梓の方が高いらしく鍵音さんが悔しそうにしていたのを何度も見たことがある。

「なんだよ……結構頑張って早く終わらせただぞ」

「兄さんが頑張ったところで私のおなかは膨れません」

あからさまな暴論に軽く肩を落としながら、苦笑気味に言った。

「じゃあ、自分で作ればよかったじゃないか」

即座に肩を凄い力で掴まれ、鬼のような形相で俺を睨んできた。

今思い出したが、梓は料理ができないのだ。いくら練習しても、出来上がるのは《暗黒物質》だけで、卵焼きすら作ることが出来ない。梓はそれを気にしているらしく、料理の話題を出すといつものように憤怒の表情でにらみつけてくる。

「分かった、分かった。今作るから待ってるって」

ずっと玄関で立ち止まっていたので履いていた靴を脱ぎ、パタパタとせわしなく「おなかへったー」と動く梓を宥めながらキッチンに入った。

キッチンは俺がかなりこだわっただけあって、かなり広々として

いて、巨大なオーブンや、結構高価な料理道具なども用意してある。ただ、今回は早く作ることが先決なので、この料理道具を使うことは無いだろうが。

「焼飯でいいか？」

聞きながら、フライパンに火を通し、油を引いた。

「はい、もう早くできたらなんでもいいです」

分かった、と軽く返してから、卵をフライパンにしき、固まらないうちに米をいれて、軽く混ぜてから塩コショウを適当に振った。その間に冷蔵庫に行きもう切つてあるワインナーと秘伝のタレを取り出す。素早くその二つを投げ込むとジュワ という威勢のいい音が室内に響き、それと同時に食欲をそそる香りが鼻孔をつき朝から何も食べていないお腹がぐうと鳴った。

そういえば俺も腹が減つてたな、と思いつつ木べらで焼飯を混ぜながら、梓に話しかける。

「つーか料理とかやんなくても、引き出しに菓子とかあつただろ？
なんであれ食わなかったんだ？」

梓は返答に困つたように視線を逸らした。何かを言いかけるように口を開くが、すぐに閉じてしまう。もう一度視線を逸らし、頬を朱色に染めながら小さく呟く。

「わ……笑わないですか？」

「笑わないって」

「……リビングに電気ついてなくて、一人で行くのが怖かったから……」

こいつは小学生か。と思う前にぶつと笑いが噴出した。笑いを止めようと空いている片手で口を抑えようとしたが、一度出た笑いは中々堪えることが出来きない。

「あゝ！ 笑わないって言ったのに！」

涙目で上目使になりながら此方を睨む。

やっぱこいつのこの表情、我が義妹ながら可愛いな。

ぐしぐし、と強めに頭を撫でる。

「ちょ、兄さん。なんで頭を撫でるんですかっ！ 子供じゃないんですよ」

口ではそう言っているが、表情は気持ちよさげで、頭の手を払おうとはしない。これは、「もっと撫でてくれ」という合図なのだ。

「おし、これでいいかな」

片手だけで作業していた焼飯がいい感じに出来たところで、一旦などでを中断。梓の「あっ」という残念そうな声を聴きながら、器に盛り付ける。用意しておいたお盆に二つの器をのせてから、リビングに向かった。

「美味しかったです」

「そりゃよかった」

かちやかちやと音を立てる食器を洗いながら、幸せそうにソファに座る梓を横目で見る。さっきまではおなかが減ってか、頭をなでるのを途中で中断したのかどちらかわからないが、機嫌が悪そうにしていたのに、飯を食ったと途端にもう上機嫌になっている。

都合のいい奴だな。

考えながら、ちよつとからかってやろうと思い、梓に話しかける。

「しかし……今度俺が一人で出かけるときはリビングに電気つけていこうか？」

「む……まだその話を引っ張るんですか！ ……でも、お願いします。暗いところは、苦手なので」

俯きながら呟く。

予想外の反応だった。もっと、「私はそんなに子供じゃありません！」とかが来ると思っていた。

こうなると逆に心配になってくる。

「なんでいきなり暗いところがダメになったんだ？ 前まで大丈夫だ

「たじやないか」

「うん。なぜかは本当に分かんないんです、でも突然、なんだろう……何かを思い出したような」

何かスツキリしないような顔でまた悩み始めた。

昔の事……か。

俺たち兄弟には、子供のころの記憶が無い。

正確には、両親と暮らした記憶がまるまる抜け落ちている、だ。原因は詳しくは分かっていないが、鍵音さんによると何かのシヨックによるものだろうと言われている。俺も熱心に昔のことを思い出そうとしたことが無い……いや、俺のどこかで《思い出すことを拒んでいる自分がある》。

頭では全く覚えていないのに、身体がそれを拒むように記憶を閉じ込めている様な、そんな感じ。

まあ、思い出せないならそれでいいんだけどな。

「……いや、もう思い出せそうにないですし、寝ますね」

梓が小さな口を覆うように自分の手を当て、腕を上には伸ばさず。今気づいたが、梓はパジャマを着ていた。

時間的にはかなり遅いので、中学生ほどの年齢の梓が寝るにはかなり遅めだろう。

「ん……分かった。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

000 『プロローグ』（後書き）

誤字・脱字・アドバンスなどがありましたら、ご感想よろしく願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2652ba/>

ECOOR BIRTHDAY

2012年1月6日20時50分発行